

新刊  
紹介

そしてポーランド・ルネサンス文化の絶頂期はミコワイ・レイ (Mikołaj Rej, 1505~69) の『領主と村長と司祭、三者の間の短い会話』が出版された1543年である、と見なされている。この年はコペルニクスのラテン語で書かれた『天球の回転について』が出版された年でもある。16世紀はポーランド文明の「黄金の世紀」とよばれる。

この時代のポーランド文化に多大な影響を与えたものに三つの要因～人文主義、宗教改革、士族(シュラフタ)階級の政治活動～がある。ギリシャ・ラテンの古典古代に範をとる人文主義は文学に美の新しい理念をもたらして人間の尊厳と自由な生活の魅力を強調した。マルチン・ルター「九五箇条の論題」(1517)に端を発するプロテスタンティズムは、単に宗教活動にとどまらず、政治的・社会的運動と結びつき、国家の改革をもくろむ進歩的思想を生み出した。プロテスタンティズムの潮流は士族階級を巻き込んで、国政へと進出させた。ミコワイ・レイはこの三つの要因を具現した人物であり、時代精神の特異な文学的現象であった。

#### ポーランド文学の父

ポーランドのルネサンス文学においてはポーランド語とラテン語の二重使用が支配的であったが、イタリア風の人文主義の潮流の中にあつたレイは、母国語が古典古代の優れた文学の水準に達しうる芸術的表現手段であることを確信してポーランド語でのみ作品を書いた最初の作家であり、そのため「ポーランド文学の父」と称せられた。レイはプロテスタントであり、また士族階級に属し、国会の下院議員として政治に参入した。

## 『ミコワイ・レイ氏の鏡と動物園』

関口時正 (編/訳/著) (ポーランド文学古典叢書9) 未知谷 2021.11

西ヨーロッパにおけるルネサンスは3世紀にわたって(14~16世紀)花を咲かせた。しかしルネサンス文化はすべてのヨーロッパ諸国において同じ時期、同じ程度において発達したわけではない。イタリアではルネサンス文化の満開期が15世紀であったのに対してポーランドではこの新しい文化の最初の徴候が現われたのは16世紀前葉である。

本書は、レイの後期作品『鏡』と『動物園』に焦点を絞り、それらの作品の抄訳に解説を加えつつミコワイ・レイの人と文学の全体像を浮き彫りにした優れた研究であり、翻訳書というよりはむしろ関口時正氏の著作とみるべきであろう。

『鏡』(1568)は、聖書と古典文学からの引用をちりばめた自由な瞑想であるが、規模の大きな作品でそのうちの最も重要な部門は3巻からなる『真面目な人間の一生』の題で知られる。ある士族で荘園領主の青年時代・壮年時代・晩年の3期にわたる理想的人生を描いた作品。そのうちの一部(第2章第16節)が翻訳されている。四季の移り変わりに応じた田園の日常生活における家事、農事が歳時記風に生き生きと描かれており、たいへん興味深い。『鏡』は全体として人生の最終的な評価の試みであり、経験と観察の総括である。

『動物園』(1562)は670篇に及ぶ韻文による風刺詩からの抄訳。教皇、修道院、大聖堂、聖遺物、ポーランドの国家体制など、カトリック世界に対する痛烈な批判と皮肉をふくんだ風刺詩にはレイのプロテスタント精神が鮮明に表明されている。一方では、人間の「常変わらぬ心」をゆるぎない棕櫚の幹や柳の辛抱強い常緑に、「希望」を凜として立つ櫛の樹になぞらえた一連の寓意詩には「人間性」を尊重する作者の真情がにじみ出ている。

『動物園』からの「こぼれ話」としての『フィグリキ』は鋭い皮肉がコミカルに表現された「笑話」で面白い。「教皇の軍隊を率いて進軍する枢機卿」などは「神の代理人」を任じて他国を侵略する現代のどこかの国の独裁者に当てはまる風刺でもある。

(栗原成郎、東京大学名誉教授)

## 『ヤヌシュ・コルチャックの教育実践』

子どもの権利を保障する施設養育の模索 大澤亜里(著) 六花出版 2022.2

本書は、ポーランドのヤヌシュ・コルチャック(1878-1942)の社会的養育事業・施設での教育実践を主題にした歴史的事実研究である。従来我が国ではこの人物の子どもの権利条約成立史とのつながりから、その子ども観や子どもの権利に関する思想的アプローチが盛んな研究対象であったが、その思想の源泉としての教育実践の研究という立場から地道に研究発表を重ね、達成した成果である。

## コルチャック研究の進展

何よりも著者が現地ポーランド・クラクフでの語学留学にはじまり、ワルシャワ大学大学院(MC)での留学時に学んだことが下地になっている。そこでは、日本でもおなじみの W・タイス前ワルシャワ大学教授の指導を受けて、コルチャックの戦前の著作『子どもをいかに愛するか』(1918)をはじめとする作品やコルチャックに関する伝記的研究を手にするるとともに、1990年代から刊行がはじまり今年ようやく最終巻(第15巻)が出て、刊行がほぼ終了にたどり着いたポーランド語版コルチャック全集(Janusz Korczak, Dzieła, t. 1-16, Warszawa, 1992-)を入手して研究を進めた。

帰国後は北海道大学大学院(教育学)にて本格的に研究を開始し、関連する歴史研究書、社会福祉・教育史研究書、学術雑誌、また当時の教育・養育関連各種雑誌、そしてコルチャックの所属団体の年次報告書や実践同僚者たちの著作など、現在入手可能な限りの文献調査・収集にあたり、これらを利用して研究を組み立て、最終的に博士論文(2018年、北大大学院教育学院)として完成させたものである。

### 小児科医・孤児院長としての教育実践

本書では、若き小児科医時代のボランティア活動から、二つの孤児院の院長となる20年以上にわ

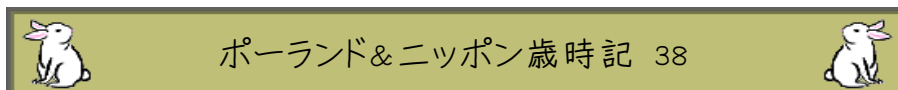
たる時期の、有名な「仲間裁判」を含む子どもの自律的自治活動を創造する多様な教育実践や活動総体の解明を目指している。なんと100年近く前の同国厚生省主催の養護施設職員向け研修で、彼は職員が「子どもの権利擁護官(オンブズマン)」となり子どもの権利リストの実現を任務とすべきと訴えていたことが最近わかったが、本書はそれが彼の教育実践を土台として成立したものと教えてくれる。



現在、わが国では、子どもの権利をめぐる国内の議論が、教育現場での子どもの権利の問題のみならず、子ども家庭庁の設置案や子ども基本法の制定案など、制度的な改革へと、ようやく踏み出そうしている。この議論の根をたどれば20世紀初めのコルチャックとその時代にさかのぼることができる(拙著『コルチャックと「子どもの権利」の源流』参照)。歴史を超えて響くコルチャックの子ども(人間)尊重の態度や思想、その具体的あり方を追求した彼の教育実践の内実について、ぜひ本書『ヤヌシ・コルチャックの教育実践』に触れ、じっくり考えていただきたい。

教育・福祉・ケアの仕事に関わる方のみならず、広く「大人」の皆様におすすめしたい一冊です。

(塚本智宏、札幌国際大学特任教授)



### 自然を眺める

今回の締め切りに何を書けばいいのかと考えていたら、辛い時に助けとなるものについて書けばいいのでは、と友達に言われました。やはり自然を眺めることでしょうか。

|                             |       |
|-----------------------------|-------|
| w wieczornej zorzy          | 夕焼けに  |
| młodych listków na drzewach | 若葉の香り |
| zielony zapach              | 蒼々と   |

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

|                     |        |
|---------------------|--------|
| sad po sąsiedzku    | 園に客    |
| wita gości zapachem | 香りで迎える |
| kwiatów jabłoni     | 花林檎    |

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

寒  
戻り  
死  
神  
ブ  
ー  
チ  
ン  
ほ  
ほ  
る  
む  
や  
返  
返  
る  
ブ  
ー  
チ  
ン  
戦  
争  
め  
ち  
ゃ  
く  
ち  
ゃ  
だ  
砲  
撃  
の  
中  
立  
っ  
て  
あ  
る  
冬  
木  
哉

岩見沢市、霜田千代磨